刀と怪異と学園と。

有夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
刀と怪異と学園と。

【Ｎコード】
Ｎ３７７１Ｖ

【作者名】
有夢

【あらすじ】
病気で死んでテンプレかと思っていたけどそんな訳でもないかと思っていると、意外とテンプレで転生しました。と言う物語。

まえがたり（前書き）

ノリで書いた反省も後悔もない

まえがたり

起きたら死んだらしい。

これは、僕がさっき聞いたばかりの話だ。死んだら、聞くことは出来ないだろうって？できないんだろうな～。それならなぜ聞くことが出来たかというと幽霊になったからです。

普通、転生者になりました。と言う、テンプレな訳でもなく幽霊となってふらついています。死因は、病死らしいですよ。新しい病気で対抗が無くてきゅうに死んだらしいですが、関係ないんですよね、霊体で生きているとなると、暇つぶしに町にでも行きますか。何もできないけど…

町に来ましたが、特に変わってないですよね。昨日も来ましたし。それと、幽霊だからと言って足が無い訳でもないんですよ。意識の問題になりますが特に気にしないんですけどね。

そのまま、ふらついていると挙動不審な幼j…少女が居ましたが、周りからは気にされていません。黒子君みたいですね分かっていると。

そのまま放置とはいかないので一応、一応（幽霊なので）話しかけてみました。

「大丈夫ですか？」

幼j…もう幼女でいいや。幼女は話しかけられた事に驚きながらこちらをじっくり観察してきました。

見えているのでしょうか？そのまま、観察？が終わった後息を吸い込んで

「確保ぉぉぉ！！」

その一言に反応して、人ごみの中から何人かの人が僕を捕獲して袋に入れてどこかに連れ去られました。

幽霊なら物質を通り抜けられるだろうと思い、それをイメージしてもできませんでした。どうやらこの袋…または、布、糸は霊体を通さない作りでできているようです。面倒な事になりましたね。霊体をこんな風に捕まえるとなるとどこかの実験室行きでしょうか？さようなら、幽霊ライフ。

長時間の移動だったので寝ていました。過去形です。文法はよくテストに出ますから気をつけましょう。
兎も角、寝ているときに袋から出すときは、普通地面に卸してからじゃないですか。それなのに頭から落とすとは痛いんですよ、霊体だけど。痛みによる、起床をして前…袋を後ろとした時ですけど…前の方を見るとさっきの幼女と知らないダンディそうな男性…元から人との関わりが少なかったからほとんど知らない人なんですけど。学校の教師やクラスメイトの名前も殆ど覚えてないんですよね。
「すいませんでした！」
マジで知らないダンディそうな男性、略してマダオ…オは何処から出て来たかと言うと男性の男から出て来たけど問題あったかな？
「あのぁ、話聞いてましたか？」
マダオのオの部分に関する考えを考えていた時に何か言っていたらしい。聞いてなかったし、誘拐未遂だし…今死んでいるから未遂。
「いやまったく聞いてないけど」
それを聞いて幼女は
「今度はしっかり聞いてくださいね」
と、言って少し息を吸って、しゃべり始めた。長くなりそうだから、お茶を飲むことにした。取り出し方は企業秘密だ。学生だったけど。
「まずあなたは死にました。これは分かってますよね。その死因となった病気なんですけどこれは天界で作られた人間界にはない病気です。なぜ、それがあなたにかかったかと言うと」
長くなりそうだから、聞き流すことにした。あと別に、書くのが面倒になったわけではないよ、考えていたけど長くなりそうだからパ

ス…結局面倒だった。
聞き流しながらお茶をすすっていると、マダオが隣に座って話しかけてきた。その内容を簡潔にまとめると以下のようになる。
・外界つまり天界、人間界のように分かれている世界への干渉があった場合等価交換が行われる。
　これは天界だけではなく他の世界でも行われる。例、鋼の錬金術師の錬金術
・僕のように干渉が起き霊体でいると抑止力が出てくる可能性があるので転生を行う。
との事らしい。
「…以上の事からあなたには大体の記憶を持って転生してもらいます」
うまい具合に幼女の話も終わった。…しかし、一回目と二回目の話の長さが違うんじゃないのだろうか。
…記憶を持って？幼女の話の最後に記憶を持って転生と言った。つまり結局のところテンプレでした。

閑話休題

「つまり僕は、よくある創作小説のチートを持って頑張れと」
さっきの話を噛み砕いて茹でてその出て来た汁の旨味と苦味が丁度良い位で聞かせてもらった。マジでダンディな男性、略してマダオから。幼女の話は関係のない部分も入ってくるので長くなる分分かり易くなる。
「まぁ、簡単に言えばそうなるな」
僕は、マダオと幼女とお茶を飲みながらのんびりしていた。お茶やコーヒーに含まれるカフェインは少量で頭を活性化させることが出来る。まぁ、死んでいるから脳…脳と言う物質はないんだけどね。
「制限は？」
チートと言ってもできることも限られるからね。

「等価交換の中でさえあればいくらでも大丈夫ですよ。数で表すなら無限の剣製だと６０位ですか。世界に干渉するものは基本的に高い数字ですね」
そういって幼女は冷たいお茶を飲んでいて、僕たちは温かいお茶を飲んでいる。それが見かけの差だ。僕は猫舌だけど霊体なら関係ないと思ってたけど味を知ろうとすると熱く感じたりする。不思議だ。つまり先の話は、自分に作用するものならその数字は小さいという事になるなら、僕が選ぶのは、
「それなら、刀語の鑢七実の見稽古と、ほとんどなんでも見える目に、それらを酷使しても大丈夫な体。それと僕に対して適応する能力」
少し欲張ってみた。これで余裕があれば知識も欲しい所だよね。
それを聞いてマダオと幼女は電卓を持って計算していた。話を聞いてそれくらいなら大丈夫じゃっていう神共は計算能力が高いと思う。二人ともやっと計算が済んだようでこっちの戻ってきたみたいだけど、少しふらついているが、マダオは、
「要望は応えられますけどその場合だと肉体耐えられないから転生先が人間じゃなくなるかもしれないが良いか？」
それはびっくりですね。目で其処まではならないでしょうから適応した能力が原因なのだろうそれでも要求は変えないけど。
「基本的に誰が見ても人で、活動範囲に限定が無い種族でお願いします。できればいろいろな知識も下さい」
僕の答えと要望に幼女が答えた
「適応した能力や自分の場所、環境についてのならできますが」
逆に言えばそれで十分足りるのだ。その世界にある技術なら見稽古で覚えればいいのだから。
「それで構いませんけど、僕はどういう世界に行くんですか？」
二人はその部分をはぐらかしたりしていたので聞けなかった。
あと、今の状態の知識や記憶とかは自我が目覚めてかららしい黒歴史が出来なくてよかったと思うけどね。

そんな訳で覚醒するまでお休みなさい。

まえがたり（後書き）

感想などがありましたらお願いします。

幻想郷で暮らしたかった（前書き）

これ以降はノリとほかの小説を元に書かれています

幻想郷で暮らしたかった

私的には、おはようございます。
世界的時間で見ればお久しぶりになるのでしょうか？と言っても僕という人格を知っている人はあの幼女とマダオだけなんですけどね。
それと、僕に適応した能力は変わったのばかりでした。
異常（アブノーマル）と、怪異でした。他にもありますよ。あんまり笑えないけどね内容的に…
異常は『現実なる幻想』《リアル・ファンタジー》と言うのでした…何処の厨二だと聞きたくなりましたが、中身は幻想と現実の境界を操るような能力みたいです。スキマ妖怪？
怪異の方は、よく分からないですが東方のワーハクタクみたいでした。
怪異は暇な時調べていくつもりです。けど、なぜに東方？
ほかの能力は調べる方法が分からないために保留です。
あ、目は常時発動してますよ。霊とか怪異や精霊なんかも見えますし夜でもしっかり前が見えます。

まぁ、能力の話はここまでにしておいて、今の年齢は8歳です。
かなり時間が飛んでいるって？知りませんよそんな事
幼少期の記憶は少し飛んでますけど気にしませんよ。名前は七花（ななか）です。七花（しちか）ではありません。あと、昔の性は覚えてません。今は八雲七花です。
幻想郷在住です。…いや、あそこは境界の境目だけど、基本的に幻想郷に居るから幻想郷在住。
たまに外に出て怪異を調べたりしてる。この言い方だけだとニートみたいに聞こえるのは不思議だ。

そんな事ないからね！そんなに引きこもってないからね！…引きこもってる。
その割に、白玉楼に結構行ったりしている。ただ、階段を使って行くとほぼ毎回妖夢が攻撃して来る。
弾幕ごっこで撃退している。面倒だ
まぁ、今日は人里に来た。理由は、自分の怪異を知っておいた方が良いだろうと思い来たのだが、基本的に藍が来てるから、いまいち場所が分からない。
けど、怪異を知るには何処に行けばいいんだっけ？
そんな感じでうろうろしていると、後ろから声をかけられた。
「こんなところで何をしてるんだ？」
後ろを向くと青い服を着て白いまたは銀色の髪で五角形か六角形に近い帽子をかぶっていた女性が居た。

「なるほど。妖怪関係について調べようとしていたのか」
「まぁ、簡単に言うとそうなりますね。慧音さん知りませんか？」
慧音さんは、白沢らしいので結構な知識を持っていると思うので聞いてみた。
「多分私と似たようなものだろうな。しかし、自分の中に居るものが分からないのか」
「と言うと白沢ですか」
中国に伝わる人語を解し万物に精通するとされる聖獣である。白澤は黄帝に１１５２０種の妖異鬼神について語り、黄帝はこれを部下に書き取らせた。これを『白澤図』という。ここでいう妖異鬼神とは人に災いをもたらす病魔や天災の象徴であり、白澤図にはそれらへの対処法も記述されており、単なる図録ではなく今でいうところの防災マニュアルのようなものである。（ｗｉｋｉｐｅｄｉａより）
自分の怪異が分かるとそれなりに楽になった。

「ありがとうございます」
「そんなに畏まらなくても良いんだけどね」
その後、慧音（さん付けしなくていいと言われた）の仕事を手伝った後、稗田家に行き見聞録を見させてもらい、幻想郷に居る上で記録に残っている怪異を調べお礼をした後帰宅した。
帰宅した後が大変だった。
「ねぇ、七花。旅に出てみない？」
急に言われた。どちらかと言うと此処で堕落した生活を送りたい。
「何で？」
理由を聞こうとしたら、下にスキマが開いて落ちて行った。
「理由？世界を見てきなさい」
笑顔でそう言いながらいた。絶対戻ってきたときに弾幕ごっこをしてやる。
僕はそれを糧に生きてやろうと決意した。

そんなこんながあり、４，５年たったある日なんだけど、振り返って思うと世界って平行世界も含まれているのだろうかと思いながらスキマを開けて移動していた。スキマが使える理由は見稽古です。本当に便利だね。
「とーちゃーく」
僕…今は私かな？まぁ、どっちでもいいけどね。ついた場所は一番最初に落とされた世界だった。時代が違うけどね。大体３５０年位前かな。その頃に吸血鬼にあったね。フルボッコにしたよ。その吸血鬼がよく分からない攻撃をしてきたから、見取って同じ技を倍以上の威力で返して（生きられる程度に）スキマを使い時間を今くらいにして旅をしていると怪異にあった。内容は化物語で知ってね。
兎も角、そんな感じでいろいろ見てきた。特に西尾さん関係の物語…そのおかげでまにわになどの技術も手に入れた。ただ一つ失敗

したなと思う事は七実さんが持っている悪刀を見ようとして七実さんも一緒に見てしまったという事だね。才能も見取って病気も見取ったが異常によって病気はかなり軽減されているけどつらいね。他には、死神が刀を振り回して戦う世界やオーラと言う気に近いものを使うハンターの世界に歪んだ望みを叶えるものを求め七組が戦争をする世界とかいろいろ行ってきた。ちなみに此処に来る前に幻想郷に行けたので、スキマ妖怪とその時の本気で弾幕ごっこをしてぎりぎり負けた。弾幕結界はそう簡単に避け切れないね。残り１０秒未満だったけど。

回想は置いといて何処なのかを知っておかないと。

「なんや、子供かいな。悪いけど死んでもらうで」

とりあえず、ストレス発散と行きますか。

「死ぬのはお前らの方だ」

そう言いながら、僕は服の中――裾から霊夢が使っている退魔針を持ち近づいてきた鬼のツボまたは急所に刺して幻想郷に入れた。方法は、針に異常を付加しているので、鬼は、現実に居れなくなり幻想になる。その幻想になる時に幻想郷の結界に引っ掛かり幻想郷に行く。つまり、一石二鳥なのかな?針を使いながら鬼を潰し終えた時に、誰か来た。

「貴様何者だ！」

そう言いながらサイドポニーをした同年代位の少女が襲ってきた。

相手が野太刀を振り下ろしてきたので針をぎりぎり当たらない所に投げると、相手はそれをはじいて、後ろに下がった。グレイズを制する者は今のを避けずひるまず弾かずに突撃してくる。つまり、遠距離に関して素人。

そう結論を下して、袖から炎刀『銃』を取出し急所以外を狙って撃った。少女はそれを弾きながら接近してきた。当たるか当たらないかが分からないくせに当たると確定してるのは弾けるってどういうことだ。

「神鳴流に距離は関係ない！」

…いや、知らないけど。ちなみにこの炎刀は異常を利用して、弾を作っている。それ以前にこの少女かなり面倒な性格しているな。みょんより真面目そうで面倒だね。

さっさと終わらせるためにスペルを使わせてもらう

「断罪『炎刀』」

内容は右衛門左衛門が使っていた断罪炎刀と同じで炎刀の発射口から炎を撃ちだすだけの技。ただスペルカードになっているので数と大きさが違い、左右と後方はほぼ無防備なスペル。あと、別に燃えないよ。

急に出て来た炎に戸惑いながら少女はそれを斬ったり避けたりしていた。避けるだけの方が楽なのに。

疲れたので、スペルを中止すると少女はなぜか勝ったような顔をしていたので相生忍法「背弄拳」を使い後ろに回った後バックドロップを繰り出し気絶させただ虚しいだけの勝利を手に入れた。

夢見物語…と言うより予知夢？（前書き）

特に書くことはないけど、何か書いていた方が面白そうだから、何らかの台詞を書く…本編には関係しない。

「幻想と現実は、向きが違うだけの直線だよ」ｂｙ七花

夢見物語…と言うより予知夢？

あの虚しい勝利の後僕は即座に逃げようかと思ったが遠くから狙われているような気がしたのでなんとなく負け犬である敗者を盾にしようかと考えながらいると捕まった。

ちくせう。

「それで何でこんな立派な部屋にこんなむらりひょんが居るんですか」

「ぬらりひょんと言われたことはあるがむらりひょんは初めて言われたんじゃが」

「失礼。噛みました」

「違うわざとじゃ」

「噛みまみた」

「「「わざとじゃない！」」」

失礼だね。本当にミスったんだよ。直そうかと思ったけどこっちの方が面白そうな気がしたからそのまま。

この部屋――学園長室に居るんだけど、なぜ女子中？の校舎内にあるんだろう。やはり、変態むらりひょんだね（笑）

「さすがにひどくないかのぉ」

僕はこのセリフを聞いて変態むらりひょんから、変態むらりさとりにランクアップした。つまり、変態性が上がった。ちなみにこの部屋に居るのは、変態とマダオ（まぁ、それなりにダンディーなおっさんの略）、幼女である。

「ひどくありません。人の心もしくは考えを読むのを意識的にするのは変態のする事であって妖怪のさとりはそのような概念を持っているから人の心を読むことが出来ますが、あなたのような変態むらりひょんがやっていいことではありません。結局、言いたいことは変態くたばれという事です」

言いたいことを言い切ったのですが、なぜ全員引き攣った顔をしているんでしょうか。そのまま引き攣った顔で死んでくれないかな～。現場検証に来た刑事さんの顔が引きつった顔を見てみたいからさ。

だからさぁ、Ｌｅｔ　Ｔｒｙ！

「「「するか！！」」」

なんという息の合った突込みなかなか見れないものが見れたね。どうでもいいけど何でここに来たんだっけ？息の合った突込みと変態を見るためだったね♪

さて、どうでもいいが書いているときと見ているときの半角と全角についての違いを考えてみると、見やすさ以外思いつかないのだがどうなんだろうね。

「えっと、それでなんでしたっけ？オーズの最終回がかなりい感じでまとまっている件についてでしたっけ？それとも映画化についての話でしたっけ」

「お前は何を言っているんだ！！そもそも何の映画化だ！！」

？映画化しているのは確かなんだけど

「それよりも貴様は何者なんじゃ」

「その台詞そのまま返すよ」

ぬらりひょん…もとい、むらりひょん、いや、変態でいいやもう。自分の行動と後頭部を見てからいえばいいのに…ほら、ほかの二人も肯いてるしさ。

「こんな時間に淡々と変態と話す趣味はないので帰っていいですか？あと、質問の答えは人間であって人間でないですね」

よくある体は人外心は人だってやつだよ。嘘だけど。体は体。心は心。結局のところ別物だよね。

「う～む」

「ああ、それ爺…もとい、変態がしてると気持ち悪すぎて殺したくなるからやめてください。そこに居る二人（？）ならまだしも」

そう言いながら、突っ込みはするのに話の方には入ってこない二

人（一人は人外な気がする）を指さしながら言うとこの変態は泣きかけていた。真面目に気持ち悪い。
「お主は、これからどうするつもりじゃ？」
「そうですね。暇潰しとしてこの学園を買い取って経営でもしましょうか」
マダオ…いや、おっさんでいいや。おっさんと爺は驚き、幼女は笑いを堪えている。
「まぁ、嘘ですけど。本当は特にやることはありません。もしこの中にまともな人間がいたら僕の前に来なさい。ってくらいですね」
後半のネタで突っ込まなかったのは、自分が普通だと思えないのか。悲しいね（笑）
爺が咳払いしてから
「ならこの学園で働かないかの？」
「え、やだ」
即答した。働かない、動かない、何も見ない。あれ？サル？見ない、聞かない、言わない。の猿。
「む…なら、見た所中学生くらいじゃから学校に行かないかの」
「まぁ、そのくらいならまぁ良いですよ」
他の世界で高校とか行っていたから中学に行かなくてもいいんだけど暇潰しくらいにはなるだろうし。
肉体年齢と精神年齢がかなりずれてきた。それと、実年齢ってどっちの年齢の事何だろうね？
「ほっほっほ。交渉成立じゃの」
あ…交渉だったんだ。相手と同じ立場か自分の方が上じゃないと意味がないと思うけど。
「何時までもお主じゃ悪いからのぉ。名前を教えてくれんかの」
あえて、此処で偽名を使うのが、僕なんだよね。つまり、信用も信頼もないってこと。
「八雲　七花」
七花（ななか）じゃなくって七花（しちか）って言った。本当に地味な偽名。結構な頻度

で使ってるけどね。
「四月から通って貰う事になるが良いかの」
「良いんじゃない」
自分が関係しようが客観的もしくは他人事で済ませる。それが七花クオリティー。
「それじゃ、眠いから帰ります。お疲れ～様でした。と、行きたいんですけど学校に通うから何処に帰ればいいんですか」
「おお、そうじゃったな。タカミチ君量まで連れっててくれんかの。確か、空いていた部屋があったじゃろ」
「あ…はい」
その後、僕は夜中にその学校の寮の一室に入って掃除を済ませて眠りについた。

「……ってことが起きそうなんだけどどうかな？」
僕は、隣りに居る女性もとい少女に問いかけた。
「確かに、君なら普通にできそうだな。学園長に君を連れてくるように言われているからついて来てもらうぞ」
「まぁ、それはいいけど。これはどうするの？」
バックドロップっを食らって気絶しているのを指さしながら言うと私が持って行くって言って持ち上げた。かっこいい～（棒読み）
その後、実際に学園長室に向かって歩き出した。ちなみに、前述に述べたことが実際にありました。

まぁ、出逢いは本当に突然に

寮生活一日目

寮に来て三，四時間寝て起きた所である。

つまり、かなり眠いので寝たいのだが、二度寝をすると明日まで起きられそうにないので寝ないことにする。うぅ、寝たい。

まぁ、本音は置いておいて、現在朝の八時朝食を作ろうとしても材料がない。スキマ（仮）に入ってたっけな？……うん。ないね。中身が結構カオスでした。

それでも、換金できそうなものが結構あった。金とか銀とかクリスタルとかルビーやサファイヤにエメラルド、あと、ダイヤモンドにパール、プラチナもあった。これだけあれば結構なお金になるよね。

とりあえずこれらを換金しに行こう。

迷子になりました。いや～広いね此処。広すぎるていうぐらい広いね。ここは量からみてどの辺？言いたくなる位に分からなくなるね。怪異か東方能力で良いのあったかな？ちなみに、私は東方の能力は持っていません。だから、見取って使えるようにしました。……あ、萃香の能力を使えば何とかなるかな。

自分の体の一部を霧のようにして人の形をとれる限界で止めた。あとはある程度経ったら、元に戻せばなんとかなる筈。しかし、此処は学生の方が多いんだろう？まさか、此処はとある科学の学園都市なのか？もしそうだとしたら、あの後頭部の長いのがアレイスターになるのか。……うん。ないな。

今思うとこの身長で換金してもらえるか？普段は１７０？後半で今は１５０？前後。萃香の能力で疎にした分が２５？位という事に

なり身長がそれだけ縮むということになる。と言うのは嘘で、２５?位を疎にしても、１７０?を保てていたけど、歩き難いのでバランスが取れるまで集めたらこの身長になった。しかし、萃香のミッシングパープルパワーで、そのまま大きくなるのはどうなんだろうか。さっきやったのを逆の順序でやれば身長を伸ばせるのだろうけど。

さっきから考え事ばかりしていて一歩も動いていないけどどうしようか。とりあえず、適当に歩けばどこかに着くだろうしね。あぁ、できれば今は幻想郷に着きたくないね。巫女に殺される。戻って来て弾幕ごっこして負けて放り出されたから挨拶とかしてないし博麗神社にお賽銭をしてないから、怒っているという事を藍から聞いたので行きたくない。

そんなことを考えながら歩いていると、着物を着た今の自分と同じくらいの身長の少女がこっちに向かって来ていた。着物って…走りにくいのに頑張るねぇ。

僕の隣を通ろうとしていたらこけた。なぜに?……ああ、アスファルトの一部が出っ張っていた。整備しておけよ。見て見ぬ振りが出来ないので声をかけておく。

「大丈夫ですか?」

そう声をかけながら相手の姿を見ていた。うん。特に怪我もないようだね。

「えっと。大丈夫やけど」

それを聞いて僕は手を彼女の前に持って行った。彼女はそれに気が付いて手を掴んだので腕を引っ張り起こした。

起こし終えた時に後ろの方から

「居たか?」

「いや…いたぞ!!」

後ろの方を見るとなんとなく漫画とかで見そうな黒服サングラス…逃亡中のハンターだ。

その黒服たちがこっちに走ってくるとなぜか僕も走り出すことに

なった。どうやら彼女はあの黒服から逃げているらしい。
「どうして…逃げてるの？」
僕は走る体制を整えながら聞くとお見合いが嫌だからしい。中学生にお見合いって…お見合いを企てた人に対して呆れられるね。
「それで逃げ切りたいの？」
「そう…やで」
着物で走っているから疲れているみたいである。
「なら、その願い叶えてあげるよ♪」
そう言いながら、彼女をお姫様抱っこして、とある能力を発動させる。
「六星神器　電光石火！」
知っている人は知っているローラースケートである。かなりの速度が出せるし、二回見たので、人混みもあっという間に抜ける事が出来る。しかし、これはどこに向かっているのであろうか。何処に行けばいいのか聞こうとしてもこの速度に驚いているのか声をかけてもパニックに陥っているらしくどうしようもなかった。
誰か…誰か…助けて下さい。（泣）
そんな事があり、数分後に彼女――木乃香さんが復活したので、何処に向かえばいいか聞き…道案内してもらいながら自分の部屋のある寮に着いた。あれ～？
道案内してもらったことで此処の土地に詳しくないことが分かったらしく道案内してくれる事になった。断ろうとしたけど、断りきれなかった。あの気迫が怖かった。どうして僕の知っている女性はどうでも良い所で気迫籠ってるんだろうか？
待っている間に疎にしていた一部を体に戻しておく。ちなみに身長は変えないでおく。
そんな事で四，五分潰していると私服に着替えたであろう木乃香さんが来た。まぁ、作者の技量が少なすぎる上に服に詳しくないので簡単にまとめると、春物の女の子らしい服。である。
「ごめん。まった？」

「いや。全然。それでどこに行くのさ？」
「う～んと。商店街付近やな」
その途中でひったくりや、強盗に出逢ったりしたけど全部蹴り倒した。ローキックから回し蹴りを食らわせて警察に突き出した。あれ？僕って不幸体質だっけ？そう思うと、今まで事件だ何だのに巻き込まれたのが納得できる。……納得したら駄目だ！
商店街の説明をしている途中で宝石屋とかがあったので換金した。大儲けした。
その後、昼食時になったので近くにあったミス〇でドーナッツを食べているときに
「なぁ、昔に会ってこうやって喋ったことなかったん？」
と聞かれたので、覚えている範囲でなかったので正直に答えた。
「…いや、なかったはず」
その後、また案内をしてもらって別れた後、雑貨店でいろいろ買ったりしてスキマ（仮）に入れて食材を買って帰った。
まぁ、帰る途中に殺人鬼にあって空間の境界を弄って殺し合いをして満足したらしく帰った。こんな所にも殺人鬼が居るんだなぁと思いながら部屋へ繋がるスキマ（仮）に入ってから空間を戻しておいた。
その前に、部屋を本格的な掃除をしないとダメだったので大変だったが…

さぁ、学校へ行こう。いやです。（前書き）

テスト期間？勉強？なにそれおいしいの？そんなこんなで始まる話じゃありません

「世の中学力こそがすべてじゃないって事」証明できたら良いですよねぇ～

さぁ、学校へ行こう。いやです。

寮生活九日目
時間が跳んだ？気にしない、気にしない。
僕は、朝起きるときは基本的に目覚まし時計を使っている。それでも最低七時には起きるようにしている。
だが、目覚ましは今までその機能が動かずに八時五九分を差していた。
徐々に大きくなる秒針の動く音。それが絶頂に達した時本来の仕事を始めた。
バヒューン。ガチャ。ジジジジジジジジイジジジジジイイジジジジイジジジ.j
「うるさい！黙れ！」
どういう訳かゲッタンしていた目覚まし時計を完全に殴り壊し、その壊れた時計を端に捕らえながら寝間着から私服に着替え少し遅い朝食の用意をし始めた。

とりあえずいつも通り和食で良いかなと思い、昨日炊いたご飯と昨日の残りのイカ大根と味噌汁の用意を始めた。と言っても温めるだけで済むから楽だけど。
七花が朝食を朝食を作り終え、食べようとしていた時…丁度これでもかと言うくらいご飯に箸をつけようとしていた寸前この部屋にある電話が鳴り始めた。
コール音を聞きながら食べる気が無かったので一応出ることにして受話器を取っての第一声が
「魚の骨を喉に詰まらせてください」
『唐突じゃｎ』ガシャン
さ、朝食を食べよう。
ふむ、大根に味がしっかり浸み込んでいるな。イカも柔らかいな

〜。
特にこれと言ったこともなく朝食を食べ終え片付けも済んでこれからどうするか考えているとまた電話が鳴りだした。どうせ電話を掛けてくる人物は分かっているが一応出ておく。
「鳥の骨を喉に詰まらせればいいと思います」
『さっきよりも物騒になってないかの』
「気のせいです。何言ってるんですか？ただの自製の挨拶ですよ」
『そ、そうかの。それで、いつになったら学校に来るのじゃ？』
「……はい？」
『いやじゃからの。今日から新学期が始まったのに来ていないという事を聞いたからの。こうやって電話してみたのじゃ』
新学期？つまり今日は四月の月曜？そう思い、部屋にある時計に出ている日付けを見ると四月一日月曜日。
否定の使用が無く新学期が始まる。
『聞いてるかの？』
「ええ。聞いてますよ。ただ、何も聞いてなかったんで今日は私服登校してもいいですよね。答えは聞きませんけど。それと人間の骨を喉に詰まらせて死んでくださいね」
そう言い放ち電話を切った。
学校に行くと言ってもこれと言って用意するものが無い。あえて言うなら文房具くらいだろう。それと、自己防衛用のナイフを一本隠し持っておこう。
用意も済んだのでさっさと学園長室に向かう。鍵？盗られる物が無いからかける必要がない。
電車に乗って行くより建物の上を駆けて行った方が速いが体力的に持ちそうに無いためスキマである程度近い所に繋げて移動した。見稽古って便利だよね。技術や特殊能力的なものなら普通に扱えるんだから。
まあ、それが原因で病弱で貧弱の最強と同じになったんだけど。
そんなことを考えながら学園長室の前まで来た。

此処からドアを蹴り壊して入るのも良いが、一応ノック位しておいた方が良いと思いノックした。
「ノックしてもしもお～～～し」
返事がない無人のようだ。よろしい、ならば蹴り壊す。
扉から少し離れて１ｍくらい離れてから、一気に加速して扉に蹴りを入れようとした。
そう、入れようとしたのだ。扉には当たらなかった。ならばどうなるかと言うと、
「今開けるからのぉおお！！？」
内側から開けられその開け方によってはその人物かそのまま部屋に突っ込むことになるのだが、今回は前者の方だった。
「……あ」

「ふぉふぉふぉ……さて今日来てもらったのは今日から通う学校についてじゃ」
おかしいな？扉を壊すことが出来る蹴りを頭に食らっておいて首折れてないの？まさか吸血鬼のような不死身性を……ないよね、ぬらりひょんだしね。ぬらりひょんがどうであれ始業式が終わっているのに生徒は残っているのかと思いながらいると、後ろの方からノック音が聞こえその後に入室許可を聞いて入って来たのは僕を寮にまで連れてった、た……た
「煙草畑？」
「高畑だよ」
何か間違えていたみたいだった。気にしないけどさ、人の名前ってなんとなく覚える気なくない？覚えてもそこまで関係が何時までも繋がっている訳でもないから覚えきるつもりもないし、その関係から行くと漫画とかのキャラの名前を覚えるのは後もその漫画を読むからその不都合さを無くすためなんだろうか？まあ、いいや戯言だし。
「それで？今から教室に行くですか？」

「うむ。高畑君についていけば大丈夫じゃ」
お前には聞いていない。ここから（男子の）教室まで遠くないかと聞くとすぐに着くとの事…どんな方法使っているのか聞いてみたいさ～？
「それじゃあ、行こうか」
僕はその言葉に肯いてついて行く事にした。

「そして辿り着いたのが（変態にとっての）理想郷と言う名の教室」
「？何を言っているんだい」
「いえいえ。何もないですよ」
たどり着いたのは男である自分とは全く関係のない女子校舎の２－Ａの教室の前。しかし、教師がいないだけで此処まで五月蝿く出来るものなのか。馬鹿でしょ、このクラス。漫画とかである問題児を集めたクラスだって言っても違和感がない。しかも、なぜか黒板消しが挟められている。暇すぎるし、自由すぎるでしょこのクラス。黒板消しが挟められている間から中の様子を見てみると、
…幽霊が居る。普通に居るし、ペン回しをしている。しかも幽霊用の霊体で出来ている奴だ。
そこから別のところを見ると、何時かの、辻斬りが居た。そこにある市内袋の中は一体何が入っているんだろうね。刀だと思うけど……
やばい、もう帰りたい。帰っていいかな。
その趣旨をアイコンタクトで伝えてみると、却下された。通じたんだ。
「それじゃあ、先に入るね」
そう言って罠を…幼稚な悪戯を無効化しながら入って行った。
今のうちに帰ってもいいかな。

教室の中は教師である高畑が入って来てから一気に静まり返った。いや、水面下で暴れているのかも知れない。なぜ彼女たちがあそこ

まで騒いでいたのかと言うと転入生が来るという事だ。
一人の少女はそんなことはなかったと思い、一人はその人物を取材したく、一人はまともであればいいと思った。つまり、ほぼ全員が興味を持っていたという事だ。
何故”ほぼ”かと言うと、言葉のあやである。
高畑が廊下の方へと入ってくるように声をかけるが返答も行動もなかった。
高畑は本当に帰ったのではないかと思い、戸に手をかけ確認しようとしたとき向こうの方から戸が開けられた。そこに居たのは、白いアヒルの様な、ペンギンの様な生き物とも言い切れないモノだった。ソレが戸を開けた手の逆の方にはプラカードが握られており、
『廊下でずっとスタンバってました』
それを見た者全員が一斉に
「「「「「「知るかぁぁぁぁぁぁ！！」」」」」」

さぁ、学校へ行こう。いやです。（後書き）

テストなんて、テストなんて滅んでしまぇぇぇぇぇ！！そんなことを思う昨日の今頃

感想などがありましたらよろしくお願いします

帰っていいかな。……え？駄目なの（前書き）

赤点なし。高得点なし。そんなテストが帰って来たから書いたくせに長くなった。
何故だろう？
そんな感じで始まりません。
ではどうぞ。

帰っていいかな。……え？駄目なの

前回のあらすじ（簡略化）
始業式により学校へ行かなくてはならなくなり、
行ったら行ったで女子中に編入、
エリザベスがスタンバってました。

まぁ、そんなことは僕には一切合切関係がありませんと言ってもいいような感じがするが、エリザベスにスタンバってもらったのは僕が頼んだからなんだけど別にいいよね。
待っている間暇だったうえに小腹も空いてたので何か買いに行こうと思った時に、丁度見つけたのでスタンバってもらったのだ。そのついでにコロッケパンを買って来いって言われたけど売り切れてた。
なので買ってきたのは、焼きそばパン、カレーパン、カツサンド、チョココロネ、クロワッサンである。
食べ歩きをしているが、始業式で早く終わっているため、ほかの教室には目測で大体数えられるくらいの人しかいなかった。クロワッサンを頬張りながら教室まで行くとかなり騒いでいた。

「元気だねぇ～。何か良い事でもあった？ああ、それとエリザベス先輩焼きそばパン買って来ました」
ぼくが声をかけて帰ってきたのは字の書かれたプラカードだった。
『俺が頼んだのはコロッケパンのはずだぞ』
「いや、コロッケパンが売り切れていたんでなんか似たようなやつ買ってきました」
そう言いながら僕は、ビニール袋の中から一度揚げた物を挟んだパン……カツサンドに当たるものを食べようとしたらエリザベスが急に振り返り刀を薙いだ。

僕はそれを上半身を後ろに倒すことで避け、その勢いのまま後方に一回転した。
「何するのさ」
僕は急に攻撃してきたエリザベスを見ると、
『なんでお前がコロッケパン食べているんだ。コロッケパンは俺のもので、お前の食べようとしているコロッケパンは今は俺のものであり、さらに言うならこの教室のコロッケパンも俺のものとなる。コロッケパンが売店にないならパン屋にまで行けば売っているだろうから買ってこい！！それは置いといて、れんほうってどう書くんだっけ』
「お前が行けよ。あと、長い。そして知らない……と言うか書かない。そしてこれコロッケパンじゃなくてカツサンドだから」
エリザベスを蹴ってからそんなセリフを呟く。思ったよりも軽かったな。
蹴りで少し後方へ飛ばされたエリザベスに追撃はしない。なんか追撃したら中から誰か出てきそうだし。
「痛いです！何をするんですか！？」
「その喋り方は、八九時か」
急に喋ったと思うとどうやら知り合いが入っていたようだった。というかなぜ八九時が入っているのだろう。お前、幽霊だろ。
「とりあえずそれから出たら？」
「それもそうですね」
そう言って八九時はエリザベスの着ぐるみ？服？みたいな白いのを脱ぐ？ために口の部分を開いて出ようとしていた。
がさっごそ　ずりゅッ
「止めろ！八九時！口の部分から出ようとするな！そんな口から何か出すのは忍者とナメック星人と中にそこら辺のおっさんが入っている白いペンギンみたいな生物だけで十分だ！！」
「それどれだけの人が分かるんですか？！」
最初のはまだしもあとの二つは大体分かるような気がすると思う

が。白いペンギンみたいな生物は口からいろいろなものが出るが忍者の方もいろいろ出せる。……奴らの中は四次元ポケットか！！
「エクスキャリバー♪エクスキャリバー♪」
僕はそんなことを言いながらシルクハット（黒）をかぶりながら歌っていた。
「全く関係がないですよ、やがみさん」
「どのやがみさんだ。僕が知っているやがみさん二人だけだ。それに僕はデスノートを持ってないし使ってもいない。そして本の中から家族となる存在が出て来た少女でもないぞ。僕の名前は八雲だ」
「失礼、噛みました」
「違う。わざとだ」
「かみまみた」
「わざとじゃない！！」
久しぶりに八九時と話すがたまにわざとやっているんじゃないだろうかと思うのもあるんだがどうなんだろう。あとメタすぎるんだがそれはどうなんだろう？いろいろと対応に困るだが、それにネタが分からないのも混ざっていると作者が完全に対応できないからな。
「気にしない方が良いと思うんじゃが」
「秀吉か！！アウトだ！アウト！！」
本当にアウトである。他の中の人ネタをやりそうで怖いんだが。
「それなら……僕と契約して、魔法少女になって欲しいんだ？」
「誰がなるか。それに僕は男だし、君が持っているモノ完全に違うだろ。それに、何でここに居るんだ」
一番気になるのは何で八九時が
「確かにそうですね。まぁ、此処に来たのも迷ったのが原因ですしね」
「やっぱりそうなんだ」
元々、迷い牛だったから、二階級昇進したとしてもその影響の一部は残っていたのだろうか。
このやり取りを完全に理解している人は何人いるのだろう。

理解している人は未来から来た人か転生者とかだろう。ネタ的に…
エリザベスの衣装はどこから持って来たのだろう。
……あれ？僕と八九時のやり取りって見えない人から見たら痛い人じゃないか！？
ちょっと待てちょっと待てちょっと待てちょっと待てちょっと待てちょっと待て
あれ？でもエリザベスの衣装？は全員に見えてたんだよな。いや、もう……いいや。めんどくさいし、考えるのをやめよう。
「今の私はマテリアルです」
「なにそれ？色違いの奴？八神さんから繋がっているのか、それ？」
「違います。マテゴの方です」
「お前どこ行っていたのぉぉぉぉ！？」
完全に別世界だった。パラレルワールドと言うより完全に別世界だ、異世界だ。原作の基とかが違うから、繋がりとか無い筈だし。
……碧陽学園に行ったことあるけど本当につながってないよね。つながってないって誰か言ってくれよ。……あ、パソコンでマテゴの事件や碧陽学園検索すればいいんじゃないか。
「そして、今なら時間の果てまで飛べそうです」
「飛ばなくていい」

閑話休題

「まぁ、そんな訳で此処に通う事になった八雲です。もう帰ってもいいですよね」
あの後、八九時は、「北海道に行きます」と言い残し出て行った。元々北海道に行くつもりだったらしいが迷った結果、此処に着いたらしい。八九時のことだから別のところに行きそうだな。
今、僕は八九時との会話で最低限の紹介があったからやらなくてもいいと思ったのだが、駄目だったみたいだ。
コマンド

たたかう
どうぐ
→にげる
にげられない
という事である。
この教室に居る全員はあの会話に着いて行けなかったため、自己紹介をし直した。
ああ、今家にあるポケモンが無性にしたい。
「質問がある人は手を挙げてね」
この担任は人の許可を取らずに何勝手に進めているんだろうか。
そんな考えと裏腹にほぼ全員が手を挙げた。さてさて、質問に答えられることがどれだけあるかな。
その中で一人急に立ち上がり
「質問だったらまず２－Ａ報道部の私、朝倉和美が進行させてもらうよー！」
「パパラッチ……てめぇーは駄目だ」
「えっと…なんで？」
「昔、パパラッチが取材って言って有無を聞かずにやったことがあってさ。それで、すぐに終わると言いながら朝から夕方になっていたからパパラッチに関して質問関係はさせないようにしてる。その後そいつの行方を知る者はいなくなったからね」
僕はそれを笑いながら言ったが、全員が最後の一言で青ざめていた。
「最後の部分は戯言だよ。」
それを伝えると、青くなっていた顔に血が回りだし顔色がよくなりながら安堵の息をついている隙に真実を言う。
「正確には全治半年の怪我を負わせたが正しいか」
結果、全員が顔色が戻りました。青白い方にだけど。
「まぁ、そんなどうでも良い真実は置いといて、僕は何を言えばいいんだい？ありきたりな事から言い始めようか。趣味は特にないけ

どあえて言うなら睡眠もしくは読書。特技は、一回見たことをほぼ完全に出来ること。でもさぁ、自己紹介で趣味や特技を聞いてもそれでどうしたの？って思うんだよね。それを聞いても、その人の印象と違ったなんて言われても困るんだよね。勝手に間違えたくせにそれをその人のせいにするんだから。責任転嫁にも歩度があると思うんだ。人の言ったことをそのまま勝手に信じて、それが真実かどうか分かってもいないのにそれだけでその人の印象を勝手に変えるのだからね。本当なんてこの世にないのにどうして探そうとしたりして、そこにあるのは現実と幻想だけなのにね。自分で作った先入観で物事を捉えるなんてバカのやる事でしかないんだよ。『正義の反対は別の正義』っていうけどそれはどちらも正当化するだけでしょ。『勝てば官軍。負ければ賊軍』なんて言葉があるんだから、『正しい。正しくない。それに関わらず正義は必ず勝つ』ってことになるのさ。自己紹介終わり」

無反応

そう言うのが良いくらいの静けさだった。正義云々は前から言ってみたかったんだよね。なんかかっこよくない？僕だけなのかこの感覚を持っているのはだとしたら直しておこう。

帰っていいかな？

帰っていいかな。……え？駄目なの（後書き）

正義云々は結構ありますよね。人によって捉え方も違いますし。
感想などがありましたらよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3771v/

刀と怪異と学園と。

2011年10月13日19時48分発行